

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991300310		
法人名	医療法人社団湘風会		
事業所名	グループホーム アイリス		
所在地	那須塩原市北赤田1587-14		
自己評価作成日	平成31年1月28日	評価結果市町村受理日	平成31年3月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク		
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189		
訪問調査日	平成31年2月18日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「ゆっくり」「一緒に」「楽しみながら」の理念の下、地域との交流に努めております。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は近年工業団地や計画道路が整備された旧西那須野町の郊外に立地し、地域の自治公民館に隣接している。2つのユニットのあるグループホームで、開設して2年目でようやく両ユニットが揃って稼働を始めたところである。建物は広い玄関ホールを中心に両翼が利用者が生活するユニットになっており、明るく広い食堂兼リビングルームや樹木を見ながら入浴ができる光庭のある浴室、廊下の突き当たりによつとした空間と中程には和室などくつろぎのスペースも設けられていて、各所に設計の工夫が見られる。職員は観察や会話を通して、利用者一人ひとりの好みや喜びを感じること、不快に思うことなどを見極め、相応しい環境を設定したり、活動を提供して利用者の生活に潤いと張りをもたらしている。開所前から地域の自治会長や民生委員との付き合いが始まり、運営推進会議への参加や地域の高齢者生きがいサロンとの交流、避難訓練の際の協力などがあり、地域に支えられる事業所として発展することが期待できる。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	普段の時や朝の申し送りや定例会議などで実践されているか確認している。	法人共通の理念「ゆっくり、一緒に、楽しみながら、その人らしくを大切に」に沿って利用者への支援が実践できているかを申し送りや職員会議の時に確認し合っている。職員は共に生活する中で、利用者一人ひとりのペースを大切に、個性や好みを見いだし、それを活かした暮らしができるように心掛けている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩に出かけて近所の方と挨拶したり、自治会の方々やボランティアを招いたりしている。	事業所のオープン前から、自治会長や民生委員、地域支え合い推進員との繋がりがあり、ボランティアを紹介してくれたり、地域の高齢者の集いである生きがいサロンとの交流の機会をつくってくれたりして、利用者の暮らしに彩りや楽しみが生まれている。毎月、数名の傾聴ボランティアが訪問し、利用者の話相手になってくれるので、職員の助けになっている。また、傾聴ボランティアから利用者一人ひとりの誕生日に折り鶴で作ったレイがプレゼントされ、喜ばれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入居者の家族や、自治会の方に認知症の理解や支援の方法を学んでいただく機会を設けたいと考えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	市担当職員、地域包括支援センター職員、自治会長、民生委員、家族が参加し地域の情報や希望・感想を聞いたりして生活支援に活かしている。	運営推進会議にはオープン前から交流のある自治会長や民生委員もメンバーとして参加し、地域防災や事業所の活動について意見を出している。家族代表からも利用者との話のきっかけになるので行事の際の写真を貼りだしてほしいとの意見があり、実行に移されている。会議は身体拘束等検討委員会も兼ねており、家族や地域の人に事業所の取り組みを理解してもらおう場にもなっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	事業所の様々な取り組みの報告は、運営推進会議で行って連携に努めている。	市職員と地域包括支援センターの職員は、毎回運営推進会議に参加し、情報伝達や介護等についてのアドバイスをしてくれている。市の介護相談員が毎月来訪し、利用者の話し相手になり、感じたことや気になることを事業所に伝えてくれるので、利用者支援等についての反省や参考にする機会になっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	安全を考え、居室のサッシは可動域の制限はあるが、玄関等は日中は鍵をかけないようにしている。身体拘束に関しては、勉強会等で職員に周知している。	事業所では、身体拘束に関する研修会を実施し、拘束をしない支援の方法を学ぶようになっている。帰宅願望の強い利用者が何人かいて、落ち着かなくなったり、出ていこうとしたりすることがあるが、職員は常にその利用者の居場所を確認し、声かけをして安全を図っている。また、外へ出て行ってしまう場合は、しばらく一緒に歩いて気分が変わるのを待つようになっている。暗闇の中での転倒や家具等への衝突を回避するために、危険性のある利用者の部屋に夜間のみ人感センサーを設置する場合もある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	学んだことを忘れずに虐待が起きないように支援を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修で勉強したり、より理解を深めるためにも再度勉強会の機会を作るようにする。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者より契約書の内容を家族・本人に確認しながら説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者から意見・要望を確認し、家族からは面会時に確認している。	家族からは面会に来訪したときに意見や要望を聞き取ることにしているが、事業所運営に関する意見や提案はあまり出てこない。運営推進会議に参加した家族代表からは、普段の様子を知って会話の糸口にするために、行事の時の写真を貼りだしてほしいという意見があり、早速実行し喜ばれている。このほか、花壇の雑草が気になるという感想やレクリエーションがマンネリにならないよう工夫してほしいという要望もあり、事業所では今後検討したいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定例会議等で提案を受けて反映させている。	定例の職員会議や申し送りの機会に、直接管理者が職員の提案を受けることで、職員意見の聴取をしている。栃木県内の法人事業所を統括する施設長も職員から直接話を聞く機会を設けている。事業所のオープンから1年が過ぎたところでもあり、職員の意見を取り入れながら、清掃用具の購入や仕事の配分などの変更や休憩時間の割り振りも行って、運営の基礎固めをしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	施設長が職員個々の努力・実績・勤務状況を把握し、職場環境・条件が整備されるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	地域等の研修・勉強会や事業所内研修に参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	合同研修会等に参加をし交流している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人と話ができる機会を持ち、馴染みの関係を作りながら本人の要望が聴けるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族とも話す機会を持ち、馴染みの関係を作って家族の要望が聴けるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・家族の意向をよく確認し、必要としている支援を見極めるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者の能力に応じて掃除や洗濯干し等をしてもらっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には面会・外出や外泊、定期受診に連れて行ってもらい、家族との繋がりを継続出来るよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が今まで利用していたコミュニティへの参加を継続したり、知人の面会が来た時は落ち着いて話せるように努めている。	家族との関係が途切れないように、利用料金の支払いを窓口受け付けにしたり、通院介助を家族にってもらうようにして、家族の事業所への来訪の機会を確保している。また、毎月の請求書等の送付の際には利用者のスナップ写真を数枚掲載した手紙を同封して様子を知らせている。家族の送迎で、入居前に通っていた地域でのカラオケの会に参加したり、理・美容室に行ったりして、これまでの地域との繋がりを継続できるようにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う入居者同士で席を同じくしたり、会話が難しい入居者には職員が寄り添う等、孤立しないように支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も、本人・家族からの相談に応じている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員が日常の会話等の中で、本人の意向を把握するよう努めている。本人の確認が難しい場合は家族に確認し本人本位に検討している。	入居前後の調査の際に生活歴や好みなどを把握するが、入居後生活をする中でも利用者一人ひとりを観察し、好きなことや嬉しく思うこと、また不快に感じることを見極めて支援に役立てている。言葉が出ない人でも、行動の中から好きなことや得意なことを見だし、生活の中に取り入れることで健康状態が維持・向上しているケースも経験している。また、利用者の環境設定にも工夫をし、トラブル回避のために席替えやユニット替え、利用者の気分転換を図るためにユニットの往来などで対応している。	利用者一人ひとりの観察から導き出すケアの工夫が随所に見てとれる。現在は定員に満たないので丁寧な対応ができていますが、この状態を定員が満たされた後も継続できるように取り組んでほしい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に本人・家族・担当のケアマネから生活歴・サービス利用経過を確認している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活の様子を職員が観察し、記録や申し送りをして情報を共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族・職員と話し合い課題を把握し、サービス担当者会議で検討し介護計画を作成する。	利用者本人および家族、介護職員、管理者、計画作成担当者が担当者会議で情報を共有し、定期的なモニタリングを参考にして介護計画を立てたり、計画の見直しをしたりしている。管理者と計画作成担当者は現場の介護にも携わり、利用者一人ひとりの状態を常に把握して、それぞれの利用者に合った計画を立て、それに基づく介護実践を行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録に記入した本人の様子やケア内容は、職員が記録を随時確認している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	手品や歌のボランティアを招いたり、地域の方とのゲーム等に参加している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	職員と一緒にスーパーに買い物に行ったり、外に散歩等に出かけたりしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族対応の受診が基本だが、対応出来ない時や緊急時には管理者やケアマネが対応する。	緊急時を除き、利用者全員が家族の協力がかかりつけ医を受診している。受診の際は職員が、バイタルチェック表とともに日頃の様子などを書いた手紙を渡すこともある。家族から管理者に伝えられた受診内容や薬の変更等は、申し送りノートや口頭で職員に周知している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員がいないため、入居者の変化を速やかに管理者・ケアマネに報告し相談・指示をうけたりしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は病院に対し、必要な情報提供をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族には重度化した場合には、病院等に移ってもらう事がある旨説明している。終末期の希望を確認し、職員間で話し合っ対応するようにしている。	これまで利用者や家族からの看取りの希望はなく、看取った事例もない。今後医療体制が整い、利用者や家族からの希望があった場合は、看取りを行いたいと考えているが、当面は利用者が重度化した場合、病院か医療体制の整った施設へ移ってもらうことになる旨を説明している。	家族にはなるべく施設を移ることはさせたくないとの希望もあることから、今後、看取り実施の検討や職員研修を進めていただきたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防職員による救急救命講習を受講して、緊急時の対応実習を行っている職員もいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日中・夜間の火災を想定した訓練を年に2回行っている。その際は消防職員が立ち会い、近隣住民にも協力してもらっている。	日頃から、特に夜間の避難の場合どうしたら最善かという事を職員間で話し合っている。先頃行われた避難訓練には、自治会長と民生委員が参加し、利用者の避難の際の見守りを担当してくれた。また、災害時の停電への備えとして、石油ストーブやカセットコンロを常備している。	自治会からは地域の防災訓練への参加の誘いを受けている。今後、なお一層、地域ぐるみの防災意識の向上を図り、事業所と地域が支え合う関係を強固にしてほしい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	介助時のトイレや浴室の扉はきちんと閉めるように徹底している。個人情報を知られないようにし、排泄の失敗や記憶違いに対しても、本人を傷つけないよう対応している。	職員は介助の際、トイレや浴室の扉を必ず閉めるなど、利用者の羞恥心に配慮している。また、利用者の言葉や態度を否定したりしないよう努めている。利用者同士の人間関係にも配慮し、入浴の順番や食事の際に座る場所を変えるなどして、利用者が明るく過ごせるよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人からなかなか訴える事が難しい場合もあるため、職員から声をかけ希望を聞き、自己決定出来るよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	トランプをやりたいとか、入浴したい等、希望にそう支援に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時の洗面・整髪の支援や入浴時等、気に入った服に着替えられるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者本人に好みを聞いたり、誕生日には食べたいメニューを作ったりしている。テーブル拭きや準備・片付け等を一緒に行っている。	週に3～4回、昼食と夕食に調理済みの料理を出しているが、それ以外の日と朝食は職員が手作りしている。食事は温かく薄味で、食材は食べやすく小さめに切られている。好き嫌いに配慮し、納豆が苦手な利用者には煮豆を出すなど喜んで食べてもらえる工夫をしている。利用者は食材を刻んだり皮をむいたり、できる範囲で調理に参加している。行事で外出した帰りにレストランに寄ったり、誕生日に好きなものを食べに行くなど、外食の機会も度々あり、利用者に喜ばれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分量は摂取時に記録し、不足がないよう注意している。水分は定時の他、入浴時や希望時にも提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後に口腔ケアを促し、義歯を外して洗い、夕食後は入れ歯洗浄剤を使ってケアをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人の排泄パターンを確認し適時にトイレへの声掛けや誘導をしている。本人が出来る事は、なるべくしてもらっている。入口にはトイレの張り紙をし分かりやすくしている。	排泄チェック表で利用者に適切な声掛けや誘導を行ってきた結果、現在ほとんどの利用者がパッドや紙パンツを利用しながらもトイレで排泄ができています。トイレの認識が薄く、不適切な場所で排尿することがあった利用者が得意な分野で積極的に動くようになった結果、排泄の自立が進んだという事例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分を取るよう促したり、食事での野菜を多めに提供したりしている。適度な運動も心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	本人の様子に合わせて、入浴の声掛けをするなどしている。	入浴は週に3回、午前中に行うことが多い。冬場などは温度差に注意し浴室を温めておくようにしている。一人ひとりの様子やタイミングを見ながら声をかけ、嫌がる利用者には無理強いないようにしている。一方のユニットにはリフト付き介護浴槽があり、片側まひの利用者の入浴に役立っている。浴室の窓から光庭の樹木を眺めることができ、季節に合わせて柚子や菖蒲を入れ季節感を感じてもらえるよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ソファーやベッドでゆったり過ごしている。眠かったり疲れている時は、レクの参加等を休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	誤薬のないようにトレーに名前といつに服用分かを書き、薬を貼っておく。服薬時には名前と日付、いつの服用かを声出し確認し、薬を飲み込むまで確認をしている。変化等があった場合は管理者・ケアマネに報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除や洗濯物干しを進んで行っている利用者がある。トランプが好きで毎日楽しんでいる方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	スーパーに買い物に行ったり、家族と定期的に出かけている方もいる。受信時に家族と外食を楽しまれる方もいる。季節ごとにドライブや外食に施設で出かけている。	暖かい時期は班に分かれて近所を散策したり、近くの和菓子屋さんにおやつを買いに行ったりしている。花見や紅葉狩りなどの行事ではドライブの帰りに食事を楽しんでいる。病院の受診後にそのまま家族と外食を楽しむ利用者や、お正月に家に泊まる人、以前から通っていたカラオケ教室に家族と共に参加する人もいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	全員ではないが小遣いを事務所で預かっている。職員と一緒に買い物に行き必要なものを購入したりしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族への電話など本人の要望があれば、支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングは庭や道路が見渡せるようになっており、外の景色を楽しむ事が出来る。中には職員と入居者が協力して作ったカレンダーや作品、イベント時の写真等が飾られている。	共用スペースは天井が高くゆったりとした造りになっている。木目調の床と白い壁紙が清潔感を感じさせる。広い廊下、ドア全面が開くトイレ、3方向から介助ができ、光庭が望める浴室、利用者を使いやすいよう作られた低いキッチン台など、職員にも利用者にも便利で使いやすいよう工夫されている。居室のそばには、畳敷きの和室や窓辺でひなたぼっこができるスペースもあり、憩いの場となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食席やソファ等は気のあう入居者同士で座る事が出来る。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室入口には職員手作りのリースが目印としてつけられている。タンスなどは本人の馴染みの物を持って来られ、家族の写真等飾ったり、カレンダーを張ったりしている。	居室は、壁紙のデザインが部屋ごとに異なり、壁紙と同系色のカーテン、低床ベッド、車いす対応の洗面台、エアコンが備え付けられている。利用者の安全面を考慮し、各ユニットに1室ずつ超低床ベッドが設置されている部屋も用意されている。家具や家電は自由に持ち込むことが出来、家で使っていた家具を据えて、自宅の部屋そっくりにして暮らしている利用者もいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの表示等、目印をつけ分かりやすくしている。廊下・トイレ・浴室には手すりがつけられている。		